

麦 類

(1) 播種前および播種後出芽前茎葉処理剤

薬剤名	成分名	含有 %	備考
ラウンドアップマックスロード	グリホサートカリウム塩	48	少量散布にあたっては、専用ノズルを使用する。 処理後1時間以内の降雨は効果を減じるところがあるので天候に注意する。

(2) 播種後土壌処理剤 (その1)

薬剤名	成分名	含有 %	備考
カイトック乳剤 【他の剤型】 細粒剤F	ペンディメタリン リニユロン ペンディメタリン リニユロン	15 10 1.5 1	①スズメノテッポウやキク科雑草が多発する圃場では、6kg/10a散布する。 ②砂質土壌では使用しない。 ③麦出芽後は使用しない。
ガレーズ乳剤 【他の剤型】 G	ジフルフェニカン トリフルラリン ジフルフェニカン トリフルラリン	3.7 37 0.15 2	①砂質土壌では使用しない。 ②ヤムゲラに対して効果あり。 ③丁寧な覆土と処理量の厳守(薬害)。 ④土壌残効が長いので年内中に散布を終える。 ⑤葉の白化が見られる場合があるが、その後の生育に影響はない。 ⑥土壌水分の高い状態での使用は薬害を助長するので注意する。
キックボクサー細粒剤F	フロスルホカルブ リニユロン	7 1.75	①麦類に一過性の薬害(黄斑、縮葉、生育抑制)を生ずることがあるが、その後の生育・収量には影響しない。 ②砂質土壌では使用しない。 ③散播栽培で覆土を行わない場合は使用を避ける。 ④麦出芽後は使用しない。 ⑤後作にアブラナ科、ウリ科、ナス科、マメ科作物を作付する場合、処理後3ヶ月以上空 ⑥抵抗性スズメノテッポウに有効。
クリアターン乳剤 【他の剤型】 細粒剤F	ベンチオカーブ ペンディメタリン リニユロン ベンチオカーブ ペンディメタリン リニユロン	50 5 7.5 8 0.8 1.2	①砂質土壌では使用しない。 ②麦出芽後は使用しない。
クロロIPC乳剤	IPC	45.8	①気温が20℃以下の条件で使用する。 ②雑草が成長すると効果が低下するので、雑草の発生始期までに処理を行う。 ①砂質土壌では使用しない。

(2) 播種後土壌処理剤 (その2)

薬剤名	成分名	含有 %	備考
ゴーゴースン 乳剤	ペンディメタリン	30	①キ科雑草とツクサには効果が劣るのでこれらの雑草の優占圃場では使用しない。 ②砂質土壌では使用しない。
【他の剤型】 細粒剤F	ペンディメタリン	2	
サターンバアロ乳剤	プロメリン	5	①イネ科雑草に比べ、広葉雑草は効果が劣るので、広葉優先圃場では処理量を多くする。 ②は種深度が浅い場合または砂土では薬害を生じるので使用をさける。 ③砂質土壌では使用しない。 ④できるだけ雑草発生前に使用する。
【他の剤型】 粒剤	ペンチオカーブ	50	
	プロメリン ペンチオカーブ	0.8 8	
シナジオ乳剤	トリフルラリン	33	①適用雑草ツクサ科、カヤツリグサ科、キ科を 除く ②雑草の発生後では効果が劣るので、散布は雑草の発生前に行う。 ③砂質土壌では使用しない。 ④麦出芽後は使用しない。
	IPC	11	
トレファノサイド乳剤	トリフルラリン	44.5	①ツクサ科、カヤツリグサ科、キ科、アブラナ科雑草には効果が劣るので優占圃場では使用しない。 ②連年施用はスズメノテッポウに効果が劣ること(抵抗性の発生)があるので有効な剤と組み合わせる。 ③大麦には薬害を生じやすいので砂質土壌では使用しない。 ④麦生育期の散布が可能。
【他の剤型】 粒剤2.5	トリフルラリン	2.5	
バンバン細粒剤F	エスフロカルブ ジフルフェニカン	6 0.15	①麦の葉身に白斑がみられることがあるが、その後の生育・収量には影響しない。 ②砂質土壌では使用しない。 ③抵抗性スズメノテッポウに有効。

(2) 播種後土壌処理剤 (その3)

薬剤名	成分名	含有 %	備考
ボクサー(乳剤)	プロスルホカルブ	78.4	①麦類に一過性の葉害(黄斑、縮葉)を生ずることがあるが、その後の生育・収量には影響しない。 ②砂質土壌では使用しない。 ③散播栽培で覆土を行わない場合は使用を避ける。 ④マノスマには効果低い。 ⑤抵抗性スズメノテッポウに有効。
ムギレンジャー乳剤	プロスルホカルブ リニユロン	46 11.5	①後作にアブラナ科、ウリ科、ナス科、マメ科作物を作付する場合、処理後3ヶ月以上空 ②砂質土壌では使用しない。 ③砂質土壌では黄化、生育抑制を生じる場合があるので登録範囲内の低めの薬量で使用する。 ④少量散布にあたっては、専用ノズルを使用する。 ⑤抵抗性スズメノテッポウに有効。
リベレーターフロアブル	ジフルフェニカン フルフェナセット	8.4 33.6	①葉身に白化や黄化等斑症状の葉害を生じることがあるが、その後の生育・収量には影響しない。 ②薬量を遵守し、砂質系土壌では登録範囲内の少ない方の薬量で使用する。砂質土壌では使用しない。 ③火山性土(黒ボク土等)での使用は、葉害を生じる恐れがあるので事前に葉害の有無を確認し、葉害を生じた場合には使用を避ける。 ④排水不良田など土壌が極端に湿っている時、また、散布後に大量の降雨が予想される場合は使用を避ける。 ⑤大麦の出芽揃期の使用において、高薬量では葉害を生じるおそれがあるので、事前に葉害の有無を確認すること。 ⑥抵抗性スズメノテッポウに有効。
【他の剤型】 G(粒剤)	ジフルフェニカン フルフェナセット	0.2 0.6	

(2) 生育期処理剤 (その1)

薬剤名	成分名	含有 %	備考
アクチノールB乳剤	アイオキシニル	30	①接触型除草剤で、イネ科雑草には効果が無く、広葉雑草に対して効果が高い。 (ヤムグラ4葉期、カラスノエンドウ2～3葉期まで) ②遅効性である。 ※現在生産量わずか
バサグラン液剤	ベンタゾン	40	①接触型除草剤で、イネ科雑草には効果が無く、 広葉雑草に対して効果が高い (ヤムグラ、カラスノエンドウ6葉期まで) ②軽微な葉枯れが発生することがあるが、その後の生育に影響はない。
ハーモニー細粒剤F	チフェンスルフロンメチル	0.15	①砂質土壌では使用しない。 ②イネ科、広葉の同時防除が可能である。ただし、ヤムグラに効果が劣る場合がある。 ③連年施用はスズメノテッポウに効果が劣ること(抵抗性の発生)があるので有効な剤と組み合わせる。 ④麦の葉の黄化や生育抑制等の薬害が発生する事があるので処理量、処理時期は厳守する。 ⑤周辺の農作物等に飛散しないよう注意する。
ハーモニーDF	チフェンスルフロンメチル	75	①砂質土壌では使用しない。 ②スズメノテッポウ5葉期、ヤムグラ4節期までの処理でイネ科、広葉の同時防除が可能である。ただし、カラスノエンドウには効果が劣る。 ③連年施用はスズメノテッポウに効果が劣ること(抵抗性の発生)があるので有効な剤と組み合わせる。 ④体系処理でも効果が高いが、播種直後処理の補完除草としてのスポット処理、播種直後の除草剤散布を省略した生育期の単用処理も可能である。 ⑤使用量が極めて少量なので計量には留意する。 また、少量のぬるま湯で完全に溶解してから散布用の水に配合し速やかに散布する。 ⑥麦の葉の黄化や生育抑制等の薬害が発生する事があるので処理量、処理時期は厳守する。 ⑦散布時の飛散で周辺野菜の生育抑制等の薬害が出やすいため注意する(飛散防止ノズルの使用) ⑧散布後は速やかに消石灰で機械を洗浄する。 ⑨雑草の発生量により、散布薬量を加減する。(雑草の多いときは薬量は10gとする。また希釈水の量も多くする。 ⑩遅効性である。

(2) 生育期処理剤 (その2)

薬剤名	成分名	含有 %	備考
MCPソーダ塩	MCPAナトリウム塩	19.5	①ホルモン型、吸収移行型の選択性除草剤であり、使用時期(幼穂形成期)を守る ②低温時(20℃以下)は効果が劣るため注意する。 ③少量散布にあたっては、専用ノズルを使用する。

麦除草剤

1. 使用上の注意

- (1) 指定された使用時期を失しないように散布する。
- (2) 碎土、整地はできるだけいねいに行い、土壌表面をなるべく均平にする。
- (3) なるべく細かく砕いた土でいねいに覆土し、覆土深は必ず2～3cmとする。
- (4) 周辺作物に散布液がかからないように、均一に散布する。
- (5) 土壌が極端に乾燥している場合は効果が劣ることがあるので、登録の範囲内で希釈水量を多めに散布する(乳剤、水和剤)か、適度に湿っている時に使用する(粒剤)
- (6) 排水不良田や散布前後に激しい降雨が予想される時には使用をさける。(薬害)
- (7) 散布時の強風による散布ムラに留意する。

2. 麦の主要雑草と防除対策について

(1) スズメノテッポウ

【生態】イネ科、越年生。水田裏作麦では、優先雑草となっており、雑草害も著しい。近年、チフェンスルフロンメチル、トリフルラニンへの抵抗性個体が確認されている。

【防除】抵抗性個体が確認された場合は防除効果が認められる剤へ切り替える。播種前に既に大量に発生している場合は、耕起前にラウンドアップマックスロード液剤等を散布する。

(2) ヤエムグラ

【生態】アカネ科、越年生。発生期間が長く、麦にからみついて成育することから、収穫作業の障害となり、種子が収穫麦に混入する場合がある。

【防除】播種後土壌処理剤のみでは防除が困難な場合が多く、生育中期の除草剤処理が必要となる。

(3) カラスノエンドウ

【生態】マメ科、越年生。種子が大きく収穫麦に混入しやすいため、特に防除の徹底が必要となる。土中の深い位置からも発生し、発生期間が長い。

【防除】播種後土壌処理剤と生育期処理との体系処理を実施する。

(4) カズノコグサ

【生態】イネ科、越年生。土壌水分の高い圃場での発生が多い。幼植物はスズメノテッポウに似ているが、生育後期には麦より大きくなり麦の減収を招く。

【防除】播種後土壌処理剤のみでは効果が低いので、イネ科雑草に効果のある剤を生育期に処理(ハーモニーDF水和剤が比較的有効)する。

(5) タデ類

【生態】タデ科、一年生。やや湿潤な条件を好み、出芽深度が深く、生育中期から発生するため土壌処理剤のみでは効果が期待できない。

【防除】土入れ・中耕の効果が大きい。雑草の発生時期に生育期処理(ハーモニーDF水和剤(発生直前)、バサグラン液剤(発生盛期以降)が比較的効果高い)を行う。

(6) ネズミムギ・カラスムギ

【生態】イネ科、越年生。土中深い位置から発生し、発生期間が長いことから既存除草剤では十分な効果が期待できない。

【防除】水稲作付等による夏期湛水(ネズミムギは60日以上連続した湛水が必要)により種子はほぼ死滅する。圃場内に蔓延する前に手取り除草する。播種後土壌処理剤ではリベレーターフロアブル(G)が比較的効果高い。